

文理融合と多言語間のコミュニケーションを求めて彷徨う

林 良子先生（神戸大学大学院国際文化学研究科教授）

出身：東京都 東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業、同大学大学院地域文化研究科修士課程修了（修士（言語学））。東京大学大学院医学系研究科第一基礎科学専攻博士課程入学後、1995-1998年にドイツ学術交流会（DAAD）奨学金を得て、ミュンヘン大学、キール大学に留学。東京大学大学院医学系研究科修了（博士（医学））。国立障害者リハビリテーションセンター研究所リサーチレジデント、北海道医療大学専任講師を経て、平成16年4月本学国際文化学部准教授として着任、平成24年4月より国際文化学研究科教授。



米谷淳（以下、米谷）：神戸大でも文理融合的な人材育成に取り組んでいますが、林先生はまさに文理融合をされています。先生は、文系で、もともとはドイツ語を教えておられますが、東京外国語大学の修士まで出た後、東大大学院で音声の研究で医学博士を取られています。最初から音声学をやっておられたのですか。

林良子（以下、林）：東京外大でドイツ語の修士課程を終えた当時、東京外大には博士後期課程がありませんでした。ドイツ語や英語の発音は一体どうやったらうまくなるんだろうという単純な疑問から、当時、言語学の基礎的な分野のひとつとして位置づけられていた音声学という分野に興味を持ちましたが、その当時は、大きな機械をつかって、出力された専用の用紙にでてきた音声波形を、定規で計って音声の分析をやっていたという状況のころでした。もっと自由に音声进行分析したり、合成したりということができれば、言語の研究ももっと進むのになあと思っていました。この音声学の分野で、当時世界的にも最先端であった東京大学の医学部にある「音声研」と言われる音声言語医学研究施設というところで、医学博士課程があり、文系の学生でも出願が可能ということで、こちらを受験してみようと思ったのです。そこでは、主に言語病理学の研究がなされており、耳鼻科や神経内科、言語聴覚療法の分野の方々が集まる研究室でした。私はもともといつかはドイツへ行ってみたいと思っていたため、東大の博士課程に在籍中にドイツ政府の奨学金を受け、ドイツに留学しました。ドイツでは、当時の音声学はすでに完全に文理融合しており、工学や心理学と関連させて研究されていました。

米谷：先生が医学、生理学の分野に入っていくのは、もともと素地がありましたか。

林：いいえ、全くありませんでしたが、東大の医学部で理系、特に医療系、工学系の先生方、学生さんたちと大いに交流したことから、領域を超えて共同研究する楽しさというものを学んだと思っています。

米谷：文系の研究者が理系の最先端の分野に行き、必要な勉強をしながら、自身の研究をする理想的な形ですね。専門家ってというのは、一つの分野に興味を持って、それだけしかやろうとしない傾向がありますよね。

林：私の時代も、必要なものだけをやりなさいという教育だったと思いますが、特にド

イツに行って変わりましたね。もちろん、東大医学部に進んだこともあります、ドイツは主専攻と副専攻を二つ選択するため、主専攻は音声学、副専攻は言語学や日本学といったように自由に組み合わせることができました。中には、情報学や心理学を副専攻にとる学生もいて、様々な分野に目を向けやすくなっているなど思いました。

米谷： そうですね。大学の教育システム自体が、異分野の人を受け入れる形になっているのですね。数学を専門に勉強していないので、受け入れられないといったような門前払いはないのですね。

林： ドイツやヨーロッパ諸国では、そもそも大学入学試験がないので、それはありません。学部によっては定員が設けられており、試験や書類選抜があったりもしますが。現在は、日本でも言語障害学が多くの大学で学部や学科として新設され、入試では文系と理系の両方で受験できることが多いようです。

米谷： 実は、そのように必要に応じて、文理融合した研究をすることが、文理融合のかけ橋になっていくのだと思います。

林： そうですね。ただ、音声学というのはもともと学際的なので、言語学の一部とも、心理学の一部とも、教育工学の一部とも言えます。したがって隣接分野のことを勉強せざるを得ない状況でした。ドイツから帰国し、ただの言語研究だけではなく、医学部博士論文としてふさわしいものにするようにと指導教員に言われ、当時ブームになりつつあった脳の研究に興味を持ちました。2000年ごろの話です。ドイツ語と日本語の音声を比較しただけでは人文学科系での論文と同じになってしまうので、結局、日本語の音声を聞き取っているときに、脳がどう活動しているかという方向で研究をやり直し、それを論文として提出しました。

米谷： 文理融合を教育だけでしようとするのは、無理がありますね。研究と結びついた文理融合教育では、必然的に必要なものだけを相手に教え、お互いが協力・補完してやっていくのですね。

林先生は、いつから大学の教員を目指されましたか。

林： 博士課程にいたころです。しかし、ドイツから帰国してみると、現実には非常勤先も全くなくて、非常に苦勞しました。たまたまドイツにいるときに、ミュンヘン大学日本センターで日本語を教えていたことから、日本語教育に興味を持ち、帰国してすぐに日本語教育能力試験という、日本語教員の資格となるような試験を受験しました。また、國學院大學に新しく短期留学生受け入れコースができるので、日本語を教える人を探しているという話を聞きつけ、自分で売り込みに行ったところ非常勤講師として雇ってもらえることになりました。大学での非常勤の口を探すというのは、最初のうち、とても難しいことだと思っています。その後、学振をもらったり、ドイツ語の非常勤をやるようになりましたが、なかなか専任の職がなく、博士論文もなかなか進まず困っているところ、今度は医学部で助手をやってくださっていた先生の紹介で国立障害者リハビリテーションセンターの研究員ポストに空きがあるということで、そこで仕事をしながら、週1回は非常勤先で日本語やドイツ

語を教えたり、夜また研究所にもどったりして、何とか、学位論文を書き上げました。さらにこの研究所での仕事がきっかけで、今度は北海道医療大学に言語聴覚士の学部が新設されるというときに、外国語科目のコーディネーターの募集があり、応募して、ようやく専任の職を得ることができました。ですので、神戸大学に来る前までは英語の教員として勤務していたんです。新設された心理科学部の中の言語聴覚士科での外国語教育の仕事です。学科自体の立ち上げにも加わりました。そして神戸大学です。当時、CRESTという大きなプロジェクトが国際文化学部を中心に走っていたおかげで、「全学のドイツ語教育を担当でき、音声研究の実績がある者」という不思議な公募が出て、これは私しか日本にいないだろうと思って応募してみたら、すんなり採用してもらえました。ですから、なんだかひよんなことから次から次にキャリアが決まってきた感じです。

米谷：北海道医療大学と言えば、FD（ファカルティ・デベロップメント）で有名な北大名誉教授の阿部和厚先生がいらっしゃったところですね。私は神戸大学大学教育研究センター研究部にいた頃、北大が日本で最初にやったFD合宿に参加しました。林先生もFD合宿に参加しましたか。

林：やりました。泊りがけで職員や教員の方々と、様々なプレゼンの方法やグループディスカッション、大学としてのビジョンの制定など、学長や理事の方々までも一緒に議論を行なったりしたのは、すごく印象的でした。

米谷：私も、北大で当時最先端だったアクティブラーニングを阿部先生に学んで、神戸大でグループワーク中心の授業をしたところ、北大のように演劇型プレゼンをするグループも出てきました。

林：そうですね。私はそんな経験を1年生前期の基礎ゼミでよく用いて、グループディスカッションやプレゼンに応用したりしています。今では、どっちかというともはや普通の授業形態になっていますね。外国語の教育方法というのも、日進月歩で様々な教育方法が提案されていて、常に色々取り入れる努力をしています。E-learningだけではなく、反転授業、演劇を取り入れた活動など、もっと余裕があればぜひ取り入れてみたいと思っています。北海道医療大学では、FDのことだけではなく、OSCI（オスキー：医学教育において行われる技能・態度を客観的に評価する臨床能力）を用いた医療コミュニケーションの研究や、言語聴覚士のコアカリキュラム作成などにもかかりました。なんだかんだと大学教員としての基礎教育をしてもらったなあと思っています。それとともに、コミュニケーション研究というのが分野横断的であるということも身をもって理解できたと思います。

米谷：教職免許はもともとお持ちだったんですか。

林：中・高校の英語と、ドイツ語の中・高校と、4つの教員免許を大学の学部修了時に取りました。先ほどちょっと言ったように、ドイツやその後の帰国後には日本語教育もやりました。現在神戸大学では、全学のドイツ語を教えながら、学部では英語と日本語の比較の話、大学院では留学生が多いので、日本語教育に関する授業と、自分がかかわってきた言語が教育にも役に立っています。ドイツにいたころ、イタ

リア語も習得したので、国際文化学部ではイタリア語の授業も開講していました。今年、来年度もイタリアのベネチアとナポリで海外研修を行ないます。イタリアでの研修は人気があるようで、一昨年のナポリ研修には15人、今回のベネチアには14人の学生が参加しています。もともとの自分の専門はドイツ語だったのですが、ドイツ語やドイツの文化だけにとらわれることなく、EUや、例えば一昨年前には国際交流委員長としてブラジルの大学をいくつか訪問し、新たな学術協定などの締結に尽力しましたが、こういった、さらに広い視野を持てるようになったのは、外国語学習のおかげだと思っています。学生たちにもぜひ英語以外に一つ、できれば二つの外国語を身につけるように言っています。イタリア語の授業にたまにドイツ人やスペイン人、中国人の留学生が履修しにきたりすることもありましたが、それもなかなか楽しいものです。学部の演習では、インターネットを用いて、フランスやイタリアの日本語を学ぶ学生さんたちと共同で一つの課題を行なうといった遠隔共同授業も展開しています。英語でも日本語でもよいのですが、近年は、ますます相手の文化背景にまで思いやりながら、とにかくコミュニケーションできる能力が求められていると思います。大学にも外国人留学生がこれだけ多くなってきているのですから、普段から国際交流について意識していきたいですね。国際文化学研究所、というか言語文化系の分野には、特に留学生が多いです。例えば私の研究室は、大学院生は5名が中国人で、日本人は1人です。大学院では、去年、博士前期課程で日本語音声学の講義を行ないましたが、出席者は30人で、中国人が28人、韓国人1人、日本人1人といった具合でした。ただ、学部の教育や卒論研究と、大学院でのそれが別々になってしまい、うまく連携できないのは、一つの問題点になっています。

米谷：留学生は、無理と思えるような研究を強く希望するので、指導が難しいのですが、林先生はどうですか。

林：そういうことは多いですね。学部での基礎的な知識が欠けていきなり二年で修士論文を書かなければならないのですから。ただ、自分を振り返ってみると、やはりドイツに留学した当時は、専門分野の言語学とか、音声学の基礎的なことの知識が圧倒的に不足していたと思います。日本で専門分野の勉強というのは、せいぜい学部の3、4年生の2年間だけです。1年目から専門分野を徹底的に勉強してきた学生たちと張り合うのは難しく感じました。ドイツ語はうまくしゃべれるけど、中身が希薄で本当に困ってしまい、あわてて基礎的なところからドイツ語で



・スカイプを用いたドイツ語学習について発表

勉強しなおさなければなりません。神戸大学に入学を希望する学生も、外国の大学の日本語学科で4年間日本語を専門に学んできている学生が多いので、日本語は良く理解できるけれど、言語学や心理学などの専門分野の知識があまりない学生がいます。ただ、それは実は日本の学生にも当てはまるので、大学院でも基礎的なところから積み重ねるような授業をやらざるを得ない状況です。色々困ったことも起こらないわけではありませんが、自分の辛かった留学時代を思い出し、なるべく学生の立場や気持ちを想像しながら指導していくよう、心掛けています。

米谷：若い教員、大学院を目指す学生に向けてメッセージをいただけますか。先生の生き方そのものがメッセージのような気がします。

林：私の辿って来た道のりは、あまり模範的ではないので、アドバイスになりえるかわかりませんが、とにかく様々な人たちと話すことが大事だと思います。大学院生にも、学会に参加したら必ず座長に挨拶し、自分の発表に質問してくれた方には後で話しかけにいき、懇親会に出て一人でも多くの人と会話してくるよと言っています。話す内容は、学術的なことばかりではなく、実は雑談、世間話、よもやま話、なんでもよいのです。そんな中から、色々なチャンスが巡ってくることが多いし、実際そうでした。研究のヒントもそこから生まれることが多いです。ピアレビューなどが学内でもありますが、他の人の授業を見るのものすごく勉強になるので、積極的に参加するとよいと思います。ただ、最近の若い教員は、他の教員と、忙しくて話す余裕が全然ないようです。教員が集まれるスペースもありません。私は、国際文化科学研究科に着任していただいた15年になりますが、思い返してよかったことは、特に着任したてのころ、周りの教員の方々や院生さんたちと毎日のように食事に行ったり、研究室で集まってとりとめのないことを話したりと、頻繁に交流ができたことです。特に金曜日の夜には、六甲道のあたりでよくいろいろな先生方と顔を合わせるがありました。今は、自分は子育てもあり、すっかり足が遠のいてしまっているのですが。ラーニングコモンズが鶴甲第一キャンパスにできましたが、教員もどこか集まって雑談できるようなスペースがあればよいなと思います。

米谷：悩みがあれば、気兼ねなく相談できる環境があればよいですね。

林：そうですね。ただ、気になっているのは、最近は、みんなメールに頼っていて、目の前にいる人にもメールで伝えたり、メッセージを送信したりしてコミュニケーションをとっていることが多くあります。演習では、とにかく学生



ナポリ研修で遺跡発掘現場を訪れる

に隣にいる人としゃべりなさいと言います。ヨーロッパとの遠隔授業でも必ずメールやチャットではなく、直に話すようにと。直に表情を見て、声を聞いて、コミュニケーションすることはすごく大切だと思うので、時間ももったいないと思わずに、教員の方々にもいろんな人としゃべることをお勧めします。

米谷：ところで、留学生に教えるときに気をつけていることや、何か感じることはありますか。

林：留学生のほうが日本人の学生よりずっとよくできると思うことも多いです。ガッツもあります。でも、例えば、日本で自分の専門分野だけを学ぶのではなくて、日本の文化をなるべく見てほしいと思います。私は全学でドイツ語を担当していますが、ドイツ語を教えるだけではなく、ドイツで今何が起きているか、なぜドイツ語を勉強しなければいけないのかを必ず話します。一つの言語を勉強するには、背景となる地誌学的知識（ランデeskunde）や文化が大変重要だと考えて授業をやっています。だから、海外から日本に来る留学生も単に自分の就職に生かす勉強だけではなく、日本はどういう国で、どういう歴史を持っているのか、どんな文学があるのかなど、なるべく多くのことを知って楽しんでほしいとも思っています。

米谷：日本人の学生に対しては、何か意識して指導していることはありますか。

林：絶対に留学することを勧めています。経済的事情や、いろんな壁があって難しいという学生が多いですが、多彩な留学のシステムがあるので、短期でもいいからとにかく海外に出なければだめだと思っています。ただできれば、なるべく長期、海外に行ってほしい。それを目標の一つとして、語学や専門分野の勉強をより深く勉強してほしい。また、外に目を向けるだけではなく、キャンパスにたくさんいる留学生、特に中国からの留学生の中には英語が得意な人もすごく増えていて、更に日本語もこれだけできるわけですから、こういった現実を見つめ、日本の学生はすぐ近くにこういう人たちがいることをしっかり意識して欲しいと思います。

米谷：文理融合や国際交流に関するお話は、大変重要で、興味深いお話でした。どうもありがとうございました。

（インタビュー日：平成29年1月10日）